

書評

西嶋康一 著

悪性症候群とその周辺疾患

枡本真一

これまでに、悪性症候群の総説や症例報告は、和洋にかかわらず数多くなされている。精神科を標榜する医師であれば、この病態については何がしかの知識を持っているという自負はあると思う。しかし、悪性症候群はその発生率が 0.2% を下回るまれな病態である。本書の序文にあるように、「精神科の専門医であっても悪性症候群を経験していない医師も多くいる」だろうし「悪性症候群の患者を実際に診察し、治療に当たらないと悪性症候群とはどのようなものかわからないであろう」。さらに本書でも強調されているように、悪性症候群は多様な臨床像をとる。そのために、初めて悪性症候群を診療する治療者は、診断から治療まで(ふだん使い慣れない薬剤を使う!)大いに悩み、不安を感じることと思うし、かくいう評者もそうした経験をした。

本書は、そうした悩める臨床医に対し良き先達だろうとする態度を明確にしている。著者である西嶋康一先生は、四半世紀にわたり悪性症候群の臨床と研究に携わり、当該分野の第一人者である。その経験した症例数は確定できたものだけでも 40 例近くになるということであり、その豊富な経験を活かして、「悪性症候群を経験していない研修医や精神科医を想定して、著者が経験したさまざまな悪性症候群の症例を具体的に記述」しているのが本書の出色であろう。特徴的な症例のみならず、非特異的な症例や鑑別すべき病態の症例まで網羅し、その 1 つひとつについて、投薬内容、検査結果、治療内容、経過まで詳細に記載されている。悪性症候群に遭遇した初心者が本書をひもとけば、まるで経験豊富な上級医が傍らにいるかのよう

な安心感を得られるのではないか。殊に L-dopa や ECT を使用した実例も記載されているが、そうした経験を持つ医師は身近にそういるものではない。

さらに、悪性症候群と類似の病態として、セロトニン症候群と悪性緊張病についても章を改めて取り上げている。前者については、近年の SSRI の普及に伴い、注目されてきてはいるが、臨床像が精神疾患それ自体の増悪と見誤られやすく、実際の発現頻度もまだわかっていない。臨床医としては、常にセロトニン症候群の存在を頭の片隅にでも置いておかないといけないと思う。著者はここでも基礎研究から臨床研究の知見まで網羅しつつ、具体的な症例の提示もしており、読者の知識の整理と実践への応用に役立つだろう。

他にも、向精神薬の急激な中断や変更による“cholinergic rebound”や老年精神医学の分野で近年注目されているレビー小体型認知症の話題、そして、lithium, donepezil, zonisamide などの薬剤と悪性症候群との関連、発症した後に抗精神病薬を再開するタイミングなど、かゆい所に手が届くような知識についてエビデンスを踏まえて記載しているのも本書の優れた点である。

本書は一貫して臨床の現場で役立つように配慮されている。研修医からベテランまで、精神科臨床に携わる幅広い層に推薦したい。

(石川県立高松病院)

●A5 134 頁 2010 定価 2,940 円(本体 2,800 円+税) 新興医学出版社